

Ocuac News

市大山岳会ニュース

no.21

1997.3.1

大雪山旭岳から愛山溪へスキーツアー

s39 上田忠士

道内の山仲間4人で、ゴールデンウィークを利用して、大雪山の主峰旭岳からスキー滑降、中岳温泉経由愛山溪へ下るスキーツアーに出かけた。

1996年5月3日高曇り ガス

昨夜は旭岳温泉の駐車場に幕営、好天と楽しいスキーを祈って乾杯！

天気はあまりよくないが、午前中は大丈夫だろうと思い、ロープウェイで旭岳温泉から姿見に登る。ここは高度約1500m。残雪は例年なみの2~3m程度。ゲレンデスキーヤーの姿もチラホラ。ここのゲレンデは道内で最も遅くまでスキーが楽しめる。我々はシールをつけ15kg程度の荷物を背負って旭岳頂上に向かう。おおむね夏道通りに登る。傾斜はきつくないが、高度が高くなるにつれて、雪面はクラストしてきて、シールだけでは困難となる。スキーアイゼンをつける。左側は地獄谷、右遠方には十勝岳連峰、トムラウシが見える。眼下には地獄谷の噴煙も見える。姿見の池は白く結氷している。金庫岩で左折、傾斜が緩やかになると頂上は近い。3時間弱で頂上に着く。夏なら2時間のところだ。

天気は下り気味、あまりゆっくりもしておれない。シールをはずし、滑降に移る。旭岳

の裏側はすばらしい斜面が続く。雪面はクラストしているが、スキーのエッジは十分きく。熊岳に向かって大きなシュプールを描いて下る。荷物があり、転倒はゆるされず、緊張するときではあるが、最高に楽しいときでもある。熊岳とのコルに着いたときは視界100~200mぐらい。ここから左手、緩やかな沢にそって滑る。ところどころシュプールもあり助かる。地形を確認しながら30分程度で中岳温泉が確認できてほっとする。5分程度の登りで中岳温泉に到着。ここは温泉と言っても大雪山の中にあり、宿も何もない。1坪程度の広さに自然の湯が岩でためられているだけである。テントを張り、温泉につかる。ややぬるい。雪に囲まれた正に露天風呂。ここにいるのは我々パーティーのみだ。夜は風と深いガスの中。

旭岳SPA→姿見→旭岳→熊岳とのコル→中岳SPA

5月4日 ガス、高曇り

昨夜の風とガスで雪面はクラストしている。やや視界がよくなったところでテントを撤収、下山にかかる。ただ広く、緩やかな大雪原、裾合平をシールをつけて、ルートを確認しながら慎重に下る。スキー滑降すると距離と方向が全く分からなくなる。その内視界も広がり、赤旗もところどころ見られて、ピウケナイ沢の渡渉点に着く。この渡渉は水量によっては夏でも苦労するところ。ここでスキーをかつぎ、アイゼンをつけて、沢を渡り、沢の上部をトラバースして当麻乗越へ向かう。当麻乗越に着くと視界はさらに広がり、今は結氷しており大雪原となっている沼の平もよく見える。これなら問題なし。ここから愛山溪

までの4～5kmのスキー滑降に入る。ただ広く、傾斜は緩く、快適に滑降。最後に斜度20度ぐらいの森林帯を下れば愛山溪温泉である。12時前に到着。露天風呂に入り、ビールで乾杯、札幌に向かった。

中岳SPA→ピウケナイ沢渡渉→当麻乗越→沼の平→愛山溪

「飯豊山 登頂記 - 近ごろの高校生は・・・ -」

八木 信男

この記録は、96年夏に高校生を連れて飯豊山にいったときのものです。95年夏は豪雨で麓の小屋で敗退したので再度挑戦しました。

7月31日 晴れ

諸般の事情により、出発が1日遅れる。

10時 特急「白鳥」にて離阪。14時30分新潟着。小国に着いたのは18時14分。買い出しの後、駅前のラーメン屋で夕食を済ませる。タクシーに乗り、天狗平に着いたのは20時。テントを張り、就寝。

8月1日 晴れのちガス

5時 起床朝食を済ませ、7時出発。温身平を経て梅花皮（かいらぎ）沢へ入る。一年生のM本君出だし好調。先頭の平野先生にピタッとついて歩いている。しかし、突然止まる。

八木「どうした」

M本「しんどいんです」

八木「ゆっくりばてないようマイペースで行け」

M本「はい」

そんなやりとりをして10分も歩いたときだ。

登山道によくありがちな沢側に外形した土の斜面の道で、M本君は道を踏み外した。

「あーっ」という叫び声を上げ、沢側へ滑っていった。しかし、笹をつかみかろうじて止まっている。何でこんな所だと思いながら、ザイルを出す。

M本「早く助けてください」

八木「まっとけよ、しっかり樹につかまっとけよ」

まるでリポビタンDの宣伝のように「ファイト一発」している二人を見て、通りがかりの写真家のおじさんが手伝ってくれ、無事、M本君は救出されたのです。

これは幸先のよくない山行だ。

この時期は、門内沢からの出会いからしか、雪がないのだが、今年は、昨冬の大雪のせいか梶川出会いからびっしりと雪の世界だ。夏の雪面を楽しみながら、軽やかに登っていく。門内沢の出会いから、雪面は少し急になっている。途中でアイゼンをつける。

「I I D E N A I N O K A I」（いいでないのかい）というユーモラスな中年のパーティーが

ワインを飲んで休憩をしている。登るにつれ、傾斜はどんどん増してくる。M本が登りにくいようなので、6本歯のアイゼンと交換する。しかし、二人ともピッケルもアイゼンも初めてつけるのに器用に登って行く。傾斜につれ、登るペースは落ちてくる。

中の島を抜けたのは、午後4時だった。最後の草付きに着くと、ガスでルートが見えず、踏み跡もなくなった。ここでアイゼンを片方捨てる。目前には雪の壁があるだけ。とにかく上へ行こうと、登って行くと人の声がする。ガスの向こう、数十メートルの所に小屋があった。梅花皮小屋へは17時過ぎに到着。地図のコースタイムでは5時間のところを、我々は10時間かかった。

強風の中、テントを張る。平野・M本のテントはそんなに風にあおられないが、Y本・八木のテントは張った場所が悪かったのか、冬山並の風を受ける。

そして驚くべき事実が。

八木「おい、寒かったら寝袋だせや」

Y本「持って来てません」

八木「え？」

しばしの沈黙の後、

八木「ほんならどないして寝るねん」

Y本「代わりにこれ持って来ました」

と彼がザックから出して来たのは、純白のタオルケットだった。聞けば、引越しのどさくさで、寝袋を捨ててしまったとか。

幸い、風は強いが、気温は低くない。気休めに、液体の「防寒具」を飲ませる。彼は、一気に飲み干してしまい、目を白黒させているので、水を飲ませる。夜半は、フライシートがバタバタと風になびき、ミゼットのエンジン音のようだ。あまり眠れないが、Y本はよく寝ている。

8月2日 ガスのち晴れ

ふと、目を覚ますと周りが明るくなっていた。平野先生が「めし作ろう」と起こしにくる。平野・M本は、卵スープ+α、八木・Y本はラーメンと、風が強いので、それぞれで朝食を済ませ出発。梅花皮岳への登りは、朝一番でしんどい。M本もしんどそうだ。

梅花皮岳、烏帽子岳と、途中ガスの中を、登り下りを繰り返し、また、雪渓の通過も断続的にあり高山植物もたくさん咲いていた。

12時頃御西小屋に着く。計画の大日岳へはガ

スのため頂上の視界も悪いだろうと、中止。飯豊本山に向かう。午前中の天気とは打って変わり、晴れそのもの。草原の中の小道を縫うように快適に進む。途中の雪渓でかき氷ならぬ、ミルク氷をいただく。(雪渓の雪にコンデンスミルクをかけただけ)頂上には15時到着。飯豊連峰の山並みが眺められた。

ここで記念写真。頂上直下の小屋で目が飛び出る値段のビールを買い、平野先生と乾杯。「ああ！幸せ」

平野先生は日本百名山を目指していて、これでまた一つ征服。

ザイルを巻直したり、寝袋を乾かしたり・・・それにしても水くみにいった二名の生徒が遅い。ポリタンクを抱えた通りかかりの人が「水場はすごいよ、一時間待ちだよ」と言う。そして、二名が帰ってきたのだが、雪が多くて、水の出が良くなく、水はあまりくめないという。平野・八木もポリタンクを抱えて水場に行くことにする。

水場につくと「こーれくらいでんりゃあ、待ち時間も半分になるっさ」とトトロのおばあさんのようななまりのきついおじさんが、水の出を良くしたと自慢している。

おじさん「はい、次の人」

大阪のおばさんA「やっとまわってきたわ。」

＊＊さんこれもいれとくんかあ」

大阪のおばさんB「そうやそれも入れといて」

おじさん「おいおいみんな待ってんだから・・・

リュック一杯にしちゃあ夜が明けちゃうよ」

という非難にもおくせず、大阪のおばさんは30分かけて水をくんで、去って行きました。私の前に並んでいた模範的な登山スタイルのおじさんが「大阪のオバタリアンにはまいっちなあ」と関東に近い言葉でぼやき、みんなにあいづちを求めています。我々以外に並んでいる人達は、どうやらみんな関西ではない様子です。この場で大阪弁を使う勇気がなかった私は、関東弁らしく「関西は震災があったから・・・」とわけのわからぬ事を口走ってしまいました。「被災者だったらあんなことしないよ」だれかが言いました。

もやもやとした、ユーモアもエスプリもないこんなしらけた場に救世主が現れました。

これまた、模範的な登山スタイルの中年女性が、下のほうのシュルント(雪渓と岩場のすき間)に駆け降りて行き、仲間を呼んでいます。どうやら水がでているようです。そこへ、小屋の管理人さ

んが長靴で器用に雪渓をすべりおりてきました。

管理人「だめだよ、そこは。あぶないよ」
と言いながら、新しい水場を整地にかかりました。
そして、

管理人「男の人。こっちへまわって」
と言い、並んでる女性から「女はだめなの？」と
聞かれ、管理人さんは「草付きを下れる自信のあ
る人、こっちまわって」と言い直しました。

めでたく、水のパニックも解決しました。
夕食は、昨夜と違い、カレーにスパゲッティと少
し豪華でした。就寝後、またもや強風となり、ま
たミゼットが音をたてて走っていました。

8月3日 快晴

5時起床。いよいよ、今日は下山の日。大くら
尾根を下る。地図には上級者コースと書いてある
が、大したことはないだろうと思ったのが大間違
い。下山後に読んだ資料によると、夏の残雪が残
っている場合の大くら尾根は滑落などの事故に注
意することとあった。

夏の剣岳周辺ではよくあることだが、穂高のよ
うに道の整備がよくないし、雪渓の通過も要注意
である。しかし、整備がよくないということは、
それだけ自然が守られているということだから、愚
痴をいうのは、登山者の勝手な我が儘だ。なるほ
ど、上級者は、すいすいと下っていけるのだろう
が、初心者、まして本格的な登山を経験したこと
のない高校生にはつらく長い尾根の下降となった
ようだ。私も、夏山でこんなに長時間の下降を経
験したことはなかったはずだ。

「暑い」「休ませてください」「水ください」
「気をつけろよ」「すべるなよ」尾根上の会話は、
これらの言葉の繰り返しだった。地図のコースタ
イムは5時間、我々は出発午前7時前、いくつか
の岩峰を越え、長い急な山道を下り、数えきれな
い休憩を取り、終点の天狗平には午後7時過ぎと、
延々12時間近くかかった。

人の気配のない飯豊山荘の炊事場で、ビールと
ジュースで乾杯。皆よくがんばりました。

8月4日 晴れ

平野先生は鳥海山へ。他の3人は帰阪。18時
30分大阪駅で解散。

【お知らせ】

部室の整理を行ったところ、岳人、山溪な
どの古いものをたくさん出てきました。

とりあえず、私が勤務先で預かっています。
事務局で預かって頂くつもりです。

バックナンバーを見たい方は私まで連絡を
いただければと思います。

なお、**年の**号の**ページと言わ
れても探す時間的余裕がないので、お越し願っ
て自分で探していただくことが閲覧の条件で
す。

八木信男

今年の総会は4月12日(土)に開催されます。

講演は96年日本山岳会K2登山隊副隊長の
松原尚之氏を予定しています。是非お出かけ
ください。

幹事会より

マナスル登頂40周年の講演、資料 展に参加して

武部秀夫（54年卒）

さる12月7日（土）、東京は高輪プリンスホ
テルにて、日本山岳会主催の「マナスル登頂40
周年の催し」がありまして、出席いたしました。

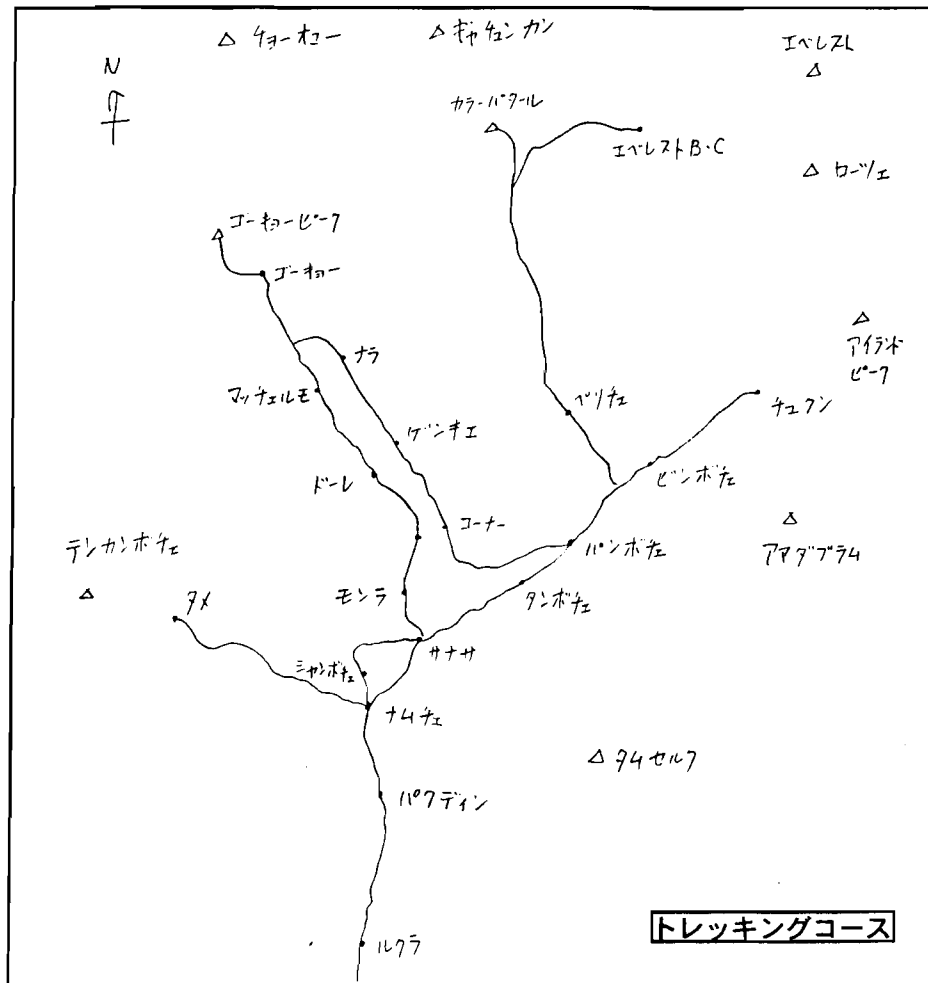
当日は、登頂者の日下田実さんの講演をはじめ、
記録映画の上映もありました。時代が時代という
ことで、私もマナスル登頂年はわずか4歳でした。
日本の国あげての一大イベントであった登山がひ
しひしと伝わってきました。ヒマラヤ登山のスター
ト、今の装備では考えられないでたち、しかし
当時は最新、最先端のテクノロジーの結晶だった
のでしょう。

ヒマラヤの峰々を見、登攀シーンを見ている
と、8000mの風に吹かれたい思いにかられます。
時代は変わっていきます。当時としてのアルピニ
ズムの最先端を感じ、これからの私の山登りをあ
らためて考える機会であったと思いました。

ヒマラヤトレッキング ゴーキョーピークへ

上田 忠士

勤続30周年でリフレッシュ休暇をもらい、トレッキングに出かける。大阪で佐々木君に見送ってもらい、関空より上海経由KTM（カトマンズ）へ向かう。私にとって3度目、ひとり旅である。



96年11月3日 大阪出発の日の夜7:30KTMに到着。空港で25ドル支払ってVISA取得。佐々木君紹介のトランスヒマラヤG.H.に投宿。15ドル。

11月4日 アニタ（※）さんにG.Hまで来てもらい、スワヤンブー寺へ案内してもらう。夜は彼女の家泊まらせてもらい、Home Madeのロキシー「エラ」をごちそうになる。

11月5日 晴 KTMよりルクラに飛ぶ。15～16人乗りの小型機。30分のフライト、天気は良くヒマラヤの山並みがよく見える。ルクラ着9:30。ここで初めてガイド「バサン・シェルパ」

と会う。久しぶりダルバートを食べて、いよいよトレッキング開始。ドードーコシ（コシは川の意）にそって歩くこと3時間。パクディンへ到着。ロッジに泊まる。

11月6日 晴 ポーターを雇って3人で7:30出発。途中国立公園入口で入園料650Rs（ルピー）支払う。ナムチェへの登りの途中エベレストを遠望する。ひと登りしてナムチェのロッジ「DANFE」着14:30。ここは高度3700m。アメリカ、ドイツ、オランダの少人数パーティーと同宿。チャンを楽しむ。コップ一杯10Rs。

11月7日 晴 起床6:00。周辺を散歩したが、氷が張っている。出発7:50、シャンボチェ、クムジュンを経てエベレストビューホテルにも寄ってみた。宮原氏不在。今日も天気がよく、ホテルからエベレスト、アマダムラムが見える。サナサへ下ってここに泊まる。到着2:30。高度3650m。

高度順応のため半日行動。ここから見上げるタムセルクは素晴らしい。

11月8日 晴 今日最高天気。昨夜は10時間寝た。出発7:50。1時間も歩くとモンラ（ラは峠の意）に着く。ここから見下ろすイムジャコーラは正に谷底だ。モンラから約400m下り、川畔のポルテ・タンガへ。ここで初めて2人の日本人トレkkerに会う。ドーレで昼食、久しぶりに川の水で洗髪。体調もよいのでマッテルモまで頑張る。到着16:00。ガスの中であった。ここは高度4470m。高山病を意識して酒なしdayとする。ポーターにチップ100Rs。夜は3人同室に寝る。寒かった。

11月9日 晴 起床6:00。キャジョ・リ（6186m）の尖峰は実に立派だ。出発7:50。約1時間歩くと昨年11月10日雪崩で25名も死亡したパンカに着く。慰霊板に手を合わせる。今年は全く雪がなく、雪崩は想像がつかないくらいだ。チョーオユーに向かってドードーヨシをさかのぼり、美しい氷河湖を2つすぎるとゴーキョーに着く。途中高山病で助力されて下山しているカナダ人と会う。ここは高度4800m。到着11:50。午後1人でチョーオユーを前面に見て上流に向かったが、あると聞いた氷河湖を発見できなかった。高山病のためかやや疲れを感じ、4時からシュラフに入る。

11月10日 快晴 今日待望のゴーキョーピークへの登りだ。出発7:10。高度差約700m。雪は日陰にある程度。問題なく2時間で素晴らしい360度に広がるピークに着く。約30名のトレkker、日本人は私1人だ。空には雲ひとつなく、エベレスト、チョーオユー、マカルー、ギャチュンカン、眼下には16kmにも及ぶゴジュンバ氷河と、その中に青い湖、氷結した白い湖が手にとるように見える。約50分頂上に留まり下山。昼食後ゴーキョーを出発、ドードーコシを渡って左岸のナラへ。高度4400m。到着14:10。

11月11日 晴 出発7:20。トーレ、ゲンキエ、コーナーを経て、タンボチェを右下に見て進むとパンボチェは近い。このコースは登って来たルートに対岸に見る。トレkkerは非常に少ない。シンガポール人と抜きつ抜かれつパンボチェ到着、15:10。高度3900m。日程を1日早めて消化してきており、カラパタールへ行くことも可能であるが、全く余裕がないので、今後チュクンとタメへ行くことにした。

11月12日 晴 今ごろ朝食はミルクとウイスリーにしている。これが私には一番合うようである。今日からまた登りだ。オルショーを経て今日の泊地ピンボチェに11:00着。ここからはアマダブラムの裏側が見え、こちらからが登山ルートとのこと。昼食後裏山を2時間4920mまで登って眼下にイムジャコーラ川を見る。広大な景色だ。ピンボチェ、高度4340m。久しぶりにビール1本飲む。210Rsと高い。就寝19:00。

11月13日 晴 今日素晴らしい天気。ローツェの南壁を見にチュクンに向かう。2時間10分で到着。高度4730m。この先は2時間余でアイランドピークBCに行ける。この山は真白な6189mの山。大したことはないらしい。ローツェ南壁は素晴らしい。高度差は3000m以上あるだろう。10:40チュクンより引き返す。私のトレッキングはこれより下山にかかる。今朝出発したピンボチェで昼食、その後パンボチェへ下った。到着15:30。

11月14日 晴 起床6:30、出発8:00。イムジャ川を左側に渡り登り切るとタンボチェだ。大きなゴンバにお参りする。ここから下って橋を渡ってひと登りするとサナサだ。日中は曇く、半袖姿だ。チャパティーの昼食後8日ぶりにナムチェのロッジへ帰ってきた。到着14:20。高山病で動けぬオーストリア人女性がベッドに横たわっていた。ここでポーターを解雇。19才のライ人。日当250Rs。9日間ごころうさん。

11月15日 晴 今日、明日はスベアー日を利用してタメへ向かう。出発8:00。旧道をとったが、このコースはトレkkerは少なく誰にも会わぬ。タメ着11:40。タメコーラを見下ろす山にへばりついたゴンバにお参り。ロッジは私とガイドとドイツ人青年の3人のみ。夜はヤクのステーキとチャン3杯を飲んだが、翌日下痢になった。ス

ケーキを焼く油がよくないのだ。



11月16日 晴 起床6:00。今日も曇ひとつない天気。タメから見るテンカンボチェ6500mの雪稜はすばらしい。傾斜60~70度、高度差2000mはあるだろう。出発7:30。今日は新道を歩きナムチェへ向かったが、トレッキング最後の日で気が緩んだのか大変疲れを感じた。ゆっくり歩きナムチェでバザールを見物してロッジに帰ったのは12:00。

今日でトレッキング終了。12日間ガイドしてくれたパサン・シェルパへチップ1000Rsと携行品をプレゼント。Thank You.

11月17日 曇り 入山以来初めて山が見えない。タムセルクもクスムカンもガスの中。宿泊のロッジ(DANFE LODGE)に別れを告げ、シャンボチェへ登る。30分でシャンボチェの飛行場に着く。8:30発予定のゴルカエアのヘリが悪天候のためなかなか来ない。待つこと4時間、12:30に前ぶれもなくやってきて、荷物を持って乗り込む。荷物も人間も一緒だ。途中ルクラで降ろされ、ここで3時間半も待たされ、KTMに到着したのは17:00。タメルのホテル「TENK I」に泊まる。20ドル。

11月18日 晴 日本への留学生の親元、知人を訪問。食事と宿泊のお世話になる。

11月19日 晴 KTM市内は車も増え、大気汚染がひどい。マスクをして歩く。日本式マッサージ屋に入る。正味60分、400Rs。

マルシャンディーホテルでアニタさん、パサン・シェルパらとお別れ会。20日午前0:45 KTMを離陸した。

※アニタさん：第3次ランタンリルン遠征（伴隊長）時のネパール側隊員の義妹。95年に半年北海道に北大研修生として来日。

※好天に恵まれ予定以上に動くことができた。このコースは人気コースであり、宿泊、食事に全く不自由はない。ガイド、ポーターのない若い西洋人トレッカーもよく見かけた。11月は日本では長期休暇がなく、また昨年雪崩で大事故があったためか、日本人トレッカーは非常に少なかった。靴は軽登山靴を使用。

※総費用 267,000円

航空券（大阪⇄KTM）117,000-

（大阪⇄札幌） 40,000-

現地費用（VISA、土産などすべて）

110,000-

※1ドル≒57Rs 1Rs≒2円

冬剣によせて

高尾 裕

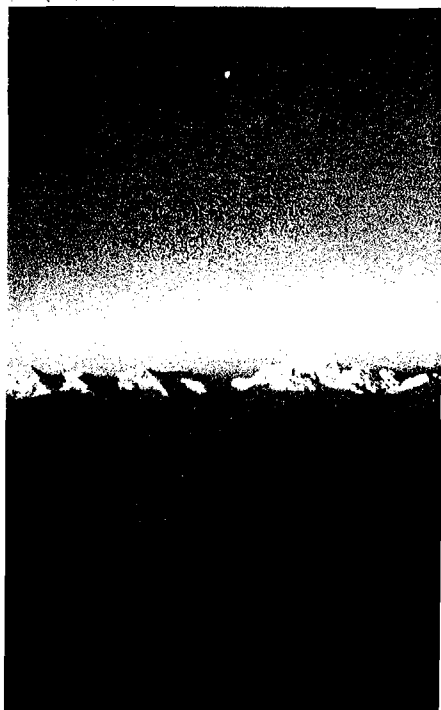
鹿島槍～十字峽～黒部別山北尾根～源次郎尾根～剣岳～馬場島

期間1996.12.28～1997.1.10

メンバー 尾形達也・高尾裕

今ここで黒部や剣のことを語るつもりはありません。そんな器でないことは重々承知しているし、今回はそのことを確認しに行っただけに過ぎません。ただ一言で感想を言うならば、体力、精神力、知力、すべてかすかすになるまで出し切れるところ、といった感じででしょうか。掛け値なしにお勧めできますが、命の保証はできません。

登山中、いろんな人に心配をかけてしまいました。まずは富山県警の方々。早月を下ってくる我々を双眼鏡で発見し、ほっと胸をなでおろしたそうです。ほかのパーティーは、天気の良いうちにとくに下山して、こんなに遅くまで剣にいたのは我々だけだった。いくら仕事とはいえ、しょせんは他人の道楽に正月返上でつきあわされているのだから、好きでやってるはずはありません。「生きて帰って来ればすべてOK。これでよかった。」こう言われたら返す言葉がない。山岳会でも一時は救助隊の編成まで考えていたようで、この場を借りて、お詫びとお礼を申し上げます。



計画を完遂し、最終下山日までに下りて来たのだから、成功であって決して遭難ではないのだが、これだけ心配をかけたのはやはり自分が非力であるということの何よりの証拠なのでしょう。山行が終わっても、もうひとつ晴れ晴れしさに欠ける日を送っているのは、けっして凍傷で痛めた指のせいだけではないと思います。しかし本当は自分が一番よく分かっているのです。このような心のもやもやが熟成すると、また山への渴望と甘美な憧憬に変わることを。本当はこれが一番くせ者なのですが、都会に戻り、生活に疲れると、夢想ばかりが一人歩きを初めてしまい、ありもしない絵空事を地図上に描いてしまう。たんに反省が足りないのでしょうか。

反省と言えば、私は現役の時、こと自分に関しては反省することを意識的に避けていたかもしれない。反省というよりもむしろ内省というべきか、とにかく自分に疑問を感じることはあっても、考えたところでわかるはずもない。当時の山岳部の

環境が多分に作用していたのは確かですが、それを言っただけの言い訳になってしまう。入部したときから、先輩も後輩もいなかったのも正直に言うと本当の「山岳部」を私は知らない。しかしそんな特殊な状況であるからこそ、ほかでは思いもよらないことを、考えていることもあったのではないかと思います。部の存続も懸案であったために、山岳部の在り方や意味については人一倍悩んだつもりでいる。断っておきますが、私はただの脳天気なオプチミストではない（と思う）。自己分析の能力は欠けていても、あくまでも現実根ざした山岳部像、もしくは岳人像を描いては、一人で真剣に悩んでいました。

少し大胆に言わせてもらえば、登山者とは現実との隔たりや矛盾を一身に引き受けて立つ者だと思っています。山に入れば、身をもって現実の汚濁を生きなければならず、あらゆる呻きや、あらゆる苦痛が無益に終わるかもしれないことを覚悟のうえで、空と深淵との間に辛うじてぶら下がっていなければならない。そして恐らく、そんな中で青白い夢を見る。それも、逃避としてのそれではなく、むしろ息をひそめて傷口に探り針を入れるような、自虐的な夢を見る。ただ問題なのは、このような態度自体が、一方では、きまじめそのものでありながら、同時に他方では滑稽そのものであるという二重性をもっていることです。

つまり登山者自身がそうした橋の両面をはっきり意識していたとすれば、一つの登攀が、彼の内面からほとばしる痛切な祈りであると同時に、道化者のパロディでもあるという事態も生じる。世間一般は、生きていれば前者、死んでしまえば後者だと判別するかもしれないが、実は、そんな画一的な側面では判断できぬことぐらい、山に登る人間がいちばんよく知っていると思います。また、私がなんとなく感じることは、そんな二面性を抱えたまま、自然との絶えざる緊張関係を築くことに、初めて登山者の存在理由が生まれるということです。深いラッセルの苦痛が快感に変わり、熱を失った太陽から受ける憂鬱を飼い馴らす。ただのマゾヒストや、ヘそ曲がりとしてではなく、そこに山に登る者のアイデンティティーの成立を、憶測を越え実感でわかるようなら立派な岳人なのでしょう。

恐らくこんな考え方は、一昔前の狭い考え方なのだと思います。自分はそれでもいいと思っていたが、私の同期の山岳部出身者で、こんなことを考えている人間はほとんどいなかったと思う。一人ぐらいいるかもしれないが、その声は全体の渦に飲み込まれて、いくらアピールしても人目に触れない。私が現役時代に悔いを残したことはまさにこのことに尽きる。つまり、少し変な志を持つものたちが、なぜ一つに集結できないのかと。学生山岳部の低迷の原因には、部員確保の困難さも一因だが、加えて、ちょっと他人とは異質な感性の人間を育む土壌が貧困であるということもある。だから唯一その点では、私は恵まれていたのです。部員が少ないというのは、変な奴が育ちやすいという皮肉な結果を生むこともあると思います。ただ同期の山仲間がいないということは返す返すも残念です。

とりとめのない話になって申し訳ないが、私はいちおう現役指導委員という立場だから、ふだん仕事をしていない分、たまにはそれらしいことを言っておかなくてはと思います。今の市大山岳部の場合、独自の発想や夢を生み出す環境は十分に整っている。その恩恵にどっぷり浸かった人間が言うのだから間違いない。しかし夢を追い、捕まえ、食うにはやはり仲間がいる。それを引っ張るリーダーもいる。部の垣根を越えてもかまわない。場合によっては二年三年でなく、もっと長期的な展望も必要だと思う。しかし莫大な資金をつぎ込み、多数の人員を導入するようなおげさな仕掛けはいらない。夢となり得る対象は身近な所にいくらでもある。大事なのは一人一人の、時には病気とも見れる思いこみと、もう一つは傷をなめ合える仲間をもっておくこと。そしてこればかりは金で買えない。だからこそ難しいし、やり甲斐がある。得られる財産は一生のものとなる。そしてきっと後から人間がついてくると信じています。

今回の記録は『岳人』3月号に和田氏の記録と共に紹介されております。どうぞ御一読を。

市大山岳会ニュース
大阪市立大学山岳会発行
会長：池永薫爾
編集：総務幹事 矢倉睦